様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：４３１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０５６０

研究課題名（和文）フレーミング効果の養育・発達過程モデルの検証：子どもへの言葉がけに注目して

研究課題名（英文）Framing effects in parenting and developmental processes: Focusing on parental messages to young children

研究代表者
佐々木　宏之（SASAKI, HIROYUKI）

新潟中央短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：８０３８９９４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児を説得するときの親のメッセージ方略に、制御適合と呼ばれる自己制御行動の性質を見出すことが目的である。幼児の親に説得的メッセージのフレーミング方略を選択させ、加えて自己制御特性と養育スタイルを測定した。その結果、促進的メッセージではポジティブフレーミングを選び、予防的メッセージではネガティブフレーミングを選ぶ傾向が認められた。また、促進的傾向が見られる親は予防的傾向の親よりもポジティブフレーミングを好むことが明らかとなった。そして、メッセージ方略は養育スタイルの個人差と養育経験の個人差の影響を受けることも確かめられた。以上の結果は、制御適合理論を支持する証拠を提供する。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to find regulatory fit in parental message strategies when parents persuade young children. Participants were asked to select from two framed messages in each regulatory focus condition, and measured participants’ chronic regulatory focus and parenting styles. The results showed that parents selected a positively framed strategy for the promotion-focused message and a negatively framed strategy for the prevention-focused message. At the same time, parents with a chronic promotion focus favored a positively framed strategy more than those with a prevention focus. The following studies found the message strategy to be moderated by the difference in parenting styles associated with the experience of childcare and with personality characteristics. These findings provide evidence supporting regulatory fit theory.

研究分野：教育心理学　認知心理学　社会心理学

キーワード：フレーミング効果　説得的メッセージ　養育行動　制御焦点　制御適合　養育スタイル

１．研究開始当初の背景

（１）メッセージの与え方によって（例えば、「薬を飲めば治る」と「薬を飲まないと治らない」）、メッセージの受け手の動機づけや意思決定が左右される現象はフレーミング効果と呼ばれている。フレーミング効果については、消費者行動や健康行動など広範な分野で研究され、応用実践されてきた。我々もこれまでの研究でフレーミング効果の応用可能性を模索し、情動・動機づけとの関連を調べる実験（Sasaki & Kanachi, 2005）や社会心理学や産業組織心理学への適用を検討してきた（Hayashi & Sasaki, 2012; Sasaki & Hayashi, 2013, 2014）。本研究では、これまでのアプローチを推し進め、発達・養育過程におけるメッセージフレーミングに着目した。

（２）発達・養育過程におけるフレーミング効果は、養育者の言葉がけ（説得的メッセージ）に応じる子どもの反応（動機づけ・意思決定）に見出すことができる。説得的メッセージに対する動機づけは、様々な媒介要因（性別や自尊心）の影響を受けることが知られ、なかでも「制御適合 regulatory fit」は自己制御と動機づけの相互作用からメッセージフレーミングの媒介効果を説明する概念として知られている。

制御適合は、ポジティブな結果への期待（促進焦点）とネガティブな結果に対する予防（予防焦点）のどちらに焦点が向かうかという動機づけの方向（制御焦点 regulatory focus）と、ポジティブな結果を追求するかネガティブな結果を回避するかという目標追求の方法との関係性を説明する（Higgins, 2000）。すなわち、制御適合とは、促進焦点とポジティブ追求方略、予防焦点とネガティブ回避方略という組み合わせのように、動機づけの方向と目標追求の方法が合致した状態を指す。Cesario, Grant, & Higgins (2004) は説得的メッセージの効果における制御適合について検討し、ポジティブな結果を目標とする促進焦点メッセージには、期待を膨らませる説得方略がより説得力をもち、ネガティブな結果の回避を目標とする予防焦点メッセージには、危機感をあおる説得方略がより説得力をもつことを見出している。

（３）Higgins (1997)の制御焦点理論によれば、自己制御の方向づけ(制御焦点)は子どもの頃の養育者との相互作用の中で育まれる。Keller (2008)は制御焦点理論の予測を検証するため、子どもの頃に受けた親の養育と現在の自分の制御焦点傾向との関係を調べた。その結果、応答的な養育を受けた人ほど促進焦点(ポジティブな結果の達成を目指す)傾向を強く示し、統制的な養育を受けた人ほど予防焦点(ネガティブな結果の回避を目指す)傾向を強く示すことが明らかとなった。しかしながら、制御焦点の成立基盤が幼児期の発達・養育過程に依拠するにも関わらず、制御焦点や制御適合と発達・養育との関係を調べた研究は多くない。

２．研究の目的

（１）本研究では、これまで健康に関する行動や購買行動を対象とすることが多かったメッセージフレーミングを育児場面に適用し、子どもへの言葉がけにおけるメッセージフレーミングを検討した。

（２）従来のメッセージフレーミング研究は、メッセージの受け手における効果を見るものであった。これに対し本研究では、メッセージの送り手がどのようなフレーミング方略を採用するか検討した。

（３）子どもへの言葉がけにおいて、制御適合に則ったフレーミング方略が採られるか検討した。促進焦点メッセージにおいてはポジティブフレーミングが採用され、予防焦点メッセージにおいてはネガティブフレーミングが採用されると予測した。

（４）動機づけの方向性についての個人差特性である制御焦点傾向がメッセージフレーミング方略に反映するか検討した。ポジティブな結果への期待で動機づけが高まる人ほど（促進焦点傾向）ポジティブフレーミングを好み、ネガティブな結果に対する予防で動機づけが高まる人ほど（予防焦点傾向）ネガティブフレーミングを好むと予測した。

（５）Keller (2008)は幼児期の親の養育スタイルと子どもの制御焦点の間に関係性を見出した。そこで本研究では、養育スタイルとフレーミング方略にも同様に、制御焦点理論の予測に合致した関係性が見出せるか検討した。すなわち、応答的な養育スタイルの親はポジティブフレーミングを好み、統制的な養育スタイルの親はネガティブフレーミングを好むと予測した。

（６）保育学生と心理学専攻学生を調査対象とした予備調査では、学生の資質の違いが子どもへの言葉がけの方略に顕著な差異として現れることはなかった（佐々木, 2010）。しかしながら、保育学生も保育者として経験年数が増すにつれ、あるいは心理学専攻学生も親となって育児を経験する中で、子どもへの言葉がけの方略に変化が現れることも考えられる。親は育児経験に伴ってより権威主義的になることが知られており、一方保育者は受容的で温かい態度の獲得が求められるためベテランの保育者ほどそうした態度が身についていると考えられる。したがって、養育経験・保育経験の影響は言葉がけの方略においては対照的な効果となって現れ、親は育児経験を重ねるほどネガティブフレーミングを選び、保育者は保育経験を重ねるほど

ポジティブフレーミングを選ぶようになると予測した。

３．研究の方法

（１）幼児の親 282 名を対象に、促進焦点場面の言葉がけと予防焦点場面の言葉がけで制御適合に則したフレーミング方略が採られるか、同時に、促進焦点傾向の親の言葉がけと予防焦点傾向の親の言葉がけに制御適合に則したフレーミング方略が見られるか検討した。

言葉がけのフレーミング方略に関する質問項目は、「虫歯になる」などネガティブな結果に関わる予防焦点メッセージ 4 項目、「大きくなる」などポジティブな結果に関わる促進焦点メッセージ 3 項目から構成された。各項目の見出しに状況設定（例えば、「おもちゃを失くす子どもに」）を提示し、ポジティブフレーミング（例えば、「ちゃんと片付けたら、おもちゃ無くならないよ」）とネガティブフレーミング（例えば、「ちゃんと片付けないと、おもちゃ失くしちゃうよ」）の二つのメッセージのうち、どちらの言い方をするか選択させた。

制御焦点傾向を調べる尺度は、促進焦点尺度 6 項目、予防焦点尺度 5 項目から構成された。両尺度の得点の差分を制御焦点傾向得点とし、得点の中央値で促進焦点群と予防焦点群に分類した。

（２）幼児の親 283 名を対象に、養育スタイルが言葉がけのフレーミング方略に影響するか検討した。

言葉がけのフレーミング方略に関する質問項目は、予防焦点メッセージ 3 項目、促進焦点メッセージ 3 項目から構成された。ポジティブフレーミングを採用するか、ネガティブフレーミングを採用するか、6 段階の双極尺度で測定した。

幼児の親の養育スタイルを Keller (2008) が使用した尺度を用いて測定した。養育スタイル尺度は応答的養育 13 項目、統制的養育 9 項目、許容的養育 8 項目から構成された。各項目について 7 段階の尺度で測定した。

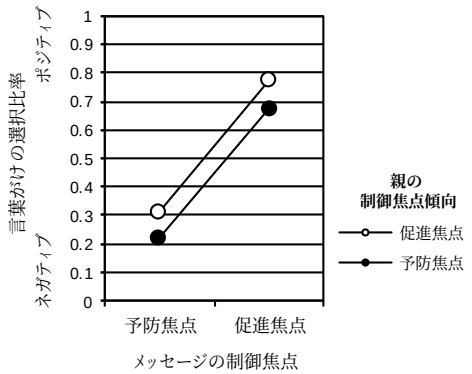
（３）幼児の親 454 名と保育者 181 名を対象に、養育・保育の経験年数によってフレーミング方略がどのように変化するか検討した。

言葉がけのフレーミング方略に関する質問項目は、予防焦点メッセージ 3 項目、促進焦点メッセージ 4 項目から構成された。ポジティブフレーミングとネガティブフレーミングの二つのメッセージのうち、どちらの言い方をするか選択させた。

保育・子育ての経験年数について、保育者は勤続年数を、幼児の親は子どもの年齢を回答した。幼児の親については第一子の年齢を子育て経験年数とした。経験年数と勤続年数をそれぞれ中央値で低群・高群に分類した。

４．研究成果

（１）子どもへの言葉がけにおいては、促進焦点メッセージではポジティブフレーミングが採用され、予防焦点メッセージではネガティブフレーミングが採用される傾向が認められた。また、促進焦点傾向を示す親は予防焦点傾向を示す親よりポジティブフレーミングを好む傾向も確かめられた。したがってこの結果は、メッセージ内容の制御焦点という状況要因と親の制御焦点傾向という個人差要因が、メッセージフレーミング方略において制御適合に則った媒介効果を示す、という我々の予測を支持している。また、これまでメッセージフレーミング研究や制御焦点・制御適合に関する研究では、メッセージの受け手に見られる効果に焦点が当てられてきたが、本研究はメッセージの送り手にも同様のフレーミング現象と制御適合が生じることを見出した。



これらの結果は、自己制御が養育者と子どもの相互作用を介して発達するという制御焦点理論（Higgins, 1997）の仮説を支持するものであり、親の制御焦点メッセージによって動機づけを高める体験を通して、子どもは自己制御を発達させている可能性を示している。

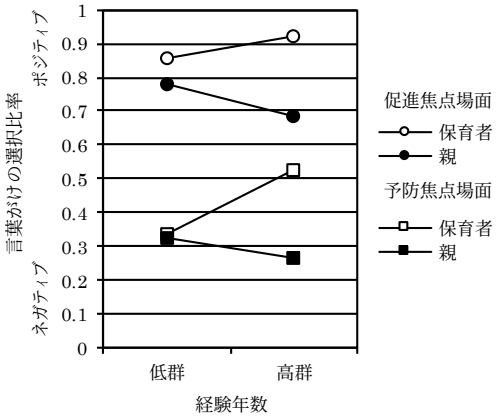
（２）親の養育スタイルとメッセージフレーミング方略の関係に関する重回帰分析の結果から、応答的な養育スタイルの養育者ほどポジティブフレーミング方略の言葉がけを選び、統制的な養育スタイルの養育者ほどネガティブフレーミング方略の言葉がけを選ぶことがわかった。したがって、養育スタイルの影響については、Keller (2008) と同様の結果が得られた。本研究の結果と Keller

	メッセージの制御焦点	
	促進焦点 (β)	予防焦点 (β)
応答的養育	.30**	.28**
統制的養育	−.21**	−.22**
許容的養育	0.02	0.09
R^2	.16**	.15**

**$p < .01$.

(2008)の結果を併せると、子どもの制御焦点傾向は親の養育スタイルとそれに伴う言葉がけの影響を受けて形成されることが示唆される。

（３）親・保育者の養育経験とメッセージフレーミング方略の関係に関して、子どもへの言葉がけが保育・育児経験に伴って変容することが明らかとなった。しかも、その変容は保育の専門性を反映し、経験豊富な保育士ほどポジティブな言葉づかいを選択するのに対して、親は育児経験を重ねるにつれてネガティブな言葉づかいを選択するようになるという結果が得られた。こうした対照的な結果は、フレーミング方略の変化が、保育士としての成長と親としての成長を反映していることを示している。



＜引用文献＞

①Cesario, J., Grant, H., & Higgins, E. T. (2004). Regulatory fit and persuasion: Transfer from “feeling right”. *Journal of Personality and Social Psychology*, 86, 388-404.

②Hayashi, Y. & Sasaki, H. (2012). Situational and dispositional factors moderating three types of framing effects: Mortality salience and regulatory focus. *Tohoku Psychologica Folia*, 71, 42-56.

③Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.

④Higgins, E. T. (2000). Making a good decision: Value from fit. *American Psychologist*, 55, 1217-1230.

⑤Keller, J. (2008). On the development of regulatory focus: The role of parenting styles. *European Journal of Social Psychology*, 38, 354-364.

⑥佐々木　宏之 (2010). 意思決定フレーミング効果の三類型 ―幼児の発達と保育の観点を踏まえて― 暁星論叢, 60, 55-72

⑦Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2013). Moderating the interaction between procedural justice and decision frame: The counterbalancing effect of personality traits. *Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied*, 147, 125-151.

⑧Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2014). Justice orientation as a moderator of the framing effect on procedural justice perception. *Journal of Social Psychology*, 154, 251-263.

⑨Sasaki, H. & Kanachi, M. (2005). The effects of trial repetition and individual characteristics on decision making under uncertainty. *Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied*, 139, 233-246.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）

①Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2015). Regulatory fit in framing strategy of parental persuasive messages to young children. *Journal of Applied Social Psychology*, 45, 253-262. （査読有）
DOI: 10.1111/jasp.12292

〔学会発表〕（計　４　件）

①佐々木　宏之 (2014). 親と保育士の言葉がけにおける経験年数に伴う方略変化 全国保育士養成協議会第 53 回研究大会

②Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2014). Regulatory fit in the relationship between the parental message strategy and message’s regulatory focus. 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France.

③佐々木　宏之、林　洋一郎 (2013). 幼少期の養育スタイルに関する親子 の評定の一致度―制御焦点傾向との関連をふまえて―　日本心理学会第 77 回大会

④佐々木　宏之、林　洋一郎 (2012). 幼児への説得的メッセージにおける制御適合 ―養育スタイルとの関連から―　日本心理学会第 76 回大会

〔その他〕

ホームページ等
http://www.niigatachuoh-jc.ac.jp/gakka/teacher_sasaki.html

６．研究組織
(1)研究代表者
佐々木　宏之　（SASAKI, Hiroyuki）
新潟中央短期大学・幼児教育科・准教授
研究者番号：80389949